

● シリーズ 私の見た日本 Vol.230

不安感を抱えて日本に来た私が見た「感覚」からつくった「日本文化」

沈 潔 (シン ジェ)

1993年浙江省杭州市生まれ。2017年、湖南大学建築学科卒業。2015年より中国政府派遣プログラムによりミラノ工科大学に1年間交換留学。2020年、東南大学建築学専攻(建築意匠および理論)修士課程修了。2021年より東京大学工学系研究科建築学専攻に研究生として在籍し、2022年より博士課程に進学、現在に至る



「私の見た日本」を語るということ

「私の見た日本」について執筆依頼が届いたのは昨年(2021年)の6月、ドイツで調査滞在中のことだった。日本で3年間生活しているとはいえ、日本人社会との関わりが薄い私は日本を客観的に語れるのか、自問せざるを得なかった。しかし、この機会をきっかけに「私の見た日本」とは何かを初めて意識的に考えるようになったのも事実だ。このコラムの読者はおそらく日本人が多いだろう。外国人が日本をどう見ているのか、日本人自身が考える日本像との違いを知りたいという趣味から読むのかもしれない。だが、私の視点とその期待に応えられるかは正直不安だ。自分が見た日本が本当に「真の日本」なのか疑問が残るし、どの国を代表するものでもなく、あくまでも個人の経験に基づくものであることは冒頭に強調しておきたい。

不安を抱える私がなぜ日本に来たのか

もし私が見た日本と日本人が見ている日本に違いがあるとすれば、それは視点や基準の違いにあるのではないだろうか。一方で、日々の生活を通じて、私の日本への理解は徐々に深まってきた。それは、日本に来る前のニュース、書籍、ドラマなどを通じて築いていた日本像とは異なり、日常の細かな体験が過去の断片的な理解に立体感を与え、時に偏見を覆すことさえよくあった。それほど、私にとって日本への理解は固定的なものではなく、常に変化している。日本に来た当初、「なぜ日本を留学先に選んだの?」とよく聞かれた。そのたびに「学部時代から日本のドラマが好きで、日本の建築デザインにも興味があったから」と答えていたが、実際のところ自分も確信はなかった。不安を抱えながらも、27歳の時の自分なりの世界観で決めた選択だった。その不安の原因は、自分の持つ「日本」のイメージが現実と一致するか分からないことにあった。ただ一つ確信していたのは、建築学、特に中国の近代化における建築学の教育体系の形成などは日本とのつながりが深いことだ。そ

の源流を辿ることは、不安以上に胸を躍らせるものだった。

私の見た「不安感」を持つ日本社会

不安感を抱きつつ日本語を学び、日本社会への解像度をあげていく間に、「私の見た日本」とはなんだろうか。簡単にまとめるのは容易ではないが、転機となったのは、研究室の読書会で、1956年の朝日新聞に掲載された「現代建築における不安感」についての記事を議論したことであった。当時は日本で高層ガラスカーテンウォール建築が導入され始めた頃で、建築家、構造家、建築史家たちが、「ガラス建築がもたらす不安感の責任は建築家にあるのか、それとも構造家にあるのか?」と激しい論争が起こっていた。ここでこの議論の詳細に踏み込むつもりはないが、私の距離を持ったから観察する立場として興味深かったのは、当時の日本社会がガラスカーテンウォール建築に対して抱いた「不安感」の背景である。特に、建築業界以外の一般の人々にとって、最大の関心事は「安全性への不安」だったように思う。この安全性への不安感は、単に新しい技術に対する不信心だけでなく、日本が地震多発国という特殊な環境がその不安の根底にあったのではないと思う。当時の日本ではガラスカーテンウォール建築はまだ実際の地震に耐えられるかどうか試されておらず、構造計算が未来の予測不可能な地震に対応できるのかどうか、不安の源だったようであった。一方、中国では1990年代以降、急速な都市化の中でガラスカーテンウォール建築が大量に建設されたが、日本のように「不安感」をめぐる議論があまり見られなかった(写真1)。その違いは、日本では地震という特殊条件により、中国のように他国の技術をそのまま信頼するのはできず、独自の試行錯誤が求められたのだと思う。この議論をきっかけに、私は中国人コミュニティの中で耳にした「日本人は不安になりやすい」という冗談めいた言葉を思い出した。もちろん、日本人が本当に「不安感」を抱きやすいかどう

かを断定することは私にはできないが、もしそうなら、地震多発国という環境が長い年月をかけて人々の心理に影響を与えた結果なのではないかと考えた。また、日本での日常生活経験から言えば、私が感じる「不安感」の多くは、日常生活のコミュニケーション不足から来ている。例えば、自分から質問しない限り、日本人の学生や先生が積極的に話しかけてくれることはほとんどなかった。そのため、私は常に「相手は何を考えているのだろうか」「自分の行動は適切だったのだろうか」といったことを推測し続けていた。もちろん、他人が私の行動に問題があっても直接指摘しないのは、日本社会の礼儀正しさの表れであると思う。ただ、外来者として、日常生活の中の沈黙やその裏にある論理を推測することは容易ではない。その結果、私の「不安感」の多くは、言葉にならない部分をうまく理解できないことから来た。このように、「不安感」は私にとって日本社会や日本建築を理解する上で重要なテーマであり、同時に日本での生活を形づくる中心的な感覚でもあった。



写真1 中国のガラスカーテンウォール建築

世界を魅了する、不安感を紡ぐ

日本建築デザイン

「不安感」を通じて形成された私の「日本像」は、果たして日本に来た目的とは一致しているのだろうか。この問いは周囲からではなく、自分の内面から湧き上がった。「日本文化が好き」という漠然とした答えでは足りず、自分自身の体験から生み出された答えが必要だと感じた。考えた結果、二つの視点が浮かび上がった。一つは近代化の視点だ。日本は文化的共通点を持つ中国より先に西洋の近代化を受け入れ、中国にとって長く参考となる存在であった。特に、中国文化と西洋文化の間に横たわる隔たりを俯瞰できる「距離感」を提供してくれる点が、私にとって日本の大きな魅力だった。例えば、イタリアに留学していた際には、中国とヨーロッパ諸国との巨大な文化的差異を実感したが、その差異をどう捉えればよいのか、なかなか手がかりが見つからなかった。中国文化はヨーロッパにとって遠い異国のように、中国人が学ぼうとしているヨーロッパ文化もまた、私たち自身の遠い想像に過ぎなかった。しかし、日本は早い段階で西洋文化を取り入れ、比較的安定した社会システムを持ち、アジアの中で東西文化の差異を捉えるうえで重要な仲介役を果たしていた。食文化や居住空間といった具体例を通じて、和と洋の接点を見ることができ、それが中国の課題を考えるヒントとなった。二つ目はモダニズム建築の本土化だ。日本の建築生産は今日、すでにモダニズム建築から独自の道を確立していた。その過程は、西洋中心の建築思想を学んだ私にとって新鮮であった。中国では伝統建築を残しながらモダニズムを学ぶ姿勢が主流で、日本建築がどのように位置づけられるのか曖昧なままであった。大学のカリキュラムでは、中国建築史と並んで外国建築史が教えられていたが、その内容は主に西洋建築史だった。日本建築は、東アジア建築史の一部として扱われることもあったが、東アジア建築史自体が中国の建築学教育ではまだ体系的に教えられていなかった。それでも、中国の建築学専攻の学生たちは日本建築に深く興味を持ち、自ら探索していた場合が多かった。ただし、ここで述べたことは中国の建築教育に日本建築史や日本近代建築を入れるべきだと主張するものではなく、日本建築の近代

化が世界中の独自の位置付けを示すためである。アジアでモダニズムが形を変える先駆地である日本は、後発の中国をはじめとするアジア諸国に経験と教訓を提供するのではないと思う。それだけでなく、ヨーロッパというモダニズムの発祥地に対しても、逆の影響を与えている。植民地化されることなく文化の連続性を保ったことも、日本建築の特異性を支えた要因であろう。日本建築の独自の近代化プロセスは中国だけでなく、モダニズムの発祥地であるいわゆる西洋建築を理解する道筋をも提供してくれるような存在だと思う。これまで述べたことは比較的抽象的な話に過ぎない。具体的に、日本建築が私をどう魅了したのか? なぜ日本建築が世界中の建築学生に憧れられるのか? これについて私個人の視点で答えるとすれば、それもやはり冒頭で述べた「不安感」や「意外性」、そしてそれが引き起こす「感覚」への影響に関連している。私自身が中国とイタリアで建築デザインを学んだ経験と比べて、日本の建築デザインが特別だと感じるのは「意外性」であった。この意外性は、日常の想像を越え、私たちが建築教育の中で習った「合理的」「論理的」とされる既成の建築概念を越えるものと言える。例えば、日本のような地震多発国で、なぜ建築の柱をこんなに「細く」できるのか? 安全性に問題はないのか? と思ってしまう(写真2、3)。それが安全性を保ちながら、なおかつ優雅さを醸し出しているのは意外だった。人々は「意外」だ

からその建築に興味を持つのだろう。また、その「意外性」は決して奇をてらったものではなく、内在的に何かしらの論理や根拠があるように感じられたのだが、簡単には見抜けない。だからこそ、もっと知りたくなる。このように、日本の建築デザインは人々の「不安」や「意外性」を刺激し、それが「探究心」へとつながる。その点で、日本建築は人々の感覚を見事に支配しているように思う。あるいは、このような感覚への衝撃こそが、日本建築が世界を魅了する理由の一つだろう。もちろん、感覚的な衝撃だけではなく、最近プリツカー賞を受賞した山本理顕氏のように、建築を通じた地域社会への配慮や人間的な温かさ感動されることも、日本建築の特徴として挙げられる。華やかさではなく、建築が日常生活に溶け込む、それは日本建築の根本的なものであろうかと私が思う(写真4、5)。私がここで語った「不安感」、「意外性」、「感覚」への衝撃は、あくまで外来者としての観察に基づく理解に過ぎない。「不安感」や「意外性」を推奨したり否定したりするつもりはないが、これらは日本で生活し学ぶなかで私が最もリアルに感じた部分であり、この時の記録として残しておきたいと思う。日本人読者がこの「外来者の妄言」をどのように受け止めるかはわからないし、何年後かの自分がこの感想を振り返る時に、「解像度の低い、自分でも笑ってしまうような認識だった」と思うかもしれないが、ある段階での記録として残す価値はあるだろうとも思う。



上/写真2、3 藤森照信「茶室」の意外性 下/写真4、5 日常に溶け込む日本建築